家伝の妙薬

登場人物

ナレーター

娘

農家の主人

おかみさん

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

海老名と厚木の境を流れている相模川は、別名「鮎川」とよばれていたぐらいですから、昔から鮎で有名でした。

以前は、鮎がよくとれたので、今のように禁漁期間がなかったそうです。ですから一年中鮎漁ができました。

捕った鮎は、たいてい串刺しにして焼き、いろり近くの天井に保存したものでした。

農家の主人

娘

近くに住む農家の主人が農作業の後、相模川に鮎釣りに行きました。

日が暮れて、竿の先が見えなくなってきたので家に帰ろうとすると、河原で身なりのきれいな娘が、泣きながら立っているのが目にとまりました。

「もし、娘さんどうなさった」

と声をかけると、

「今朝、川向こうの厚木から座間に住む親せきに会うために漁師の小舟で渡ってきましたが、約束の時間になっても迎えの舟が来ません」

と言うことでした。

しばらく舟を待っていましたが、いっこうに来る様子がありません。

農家の主人

「困ったことだのう」

日もすっかり暮れて来ました。

農家の主人

農家の主人は、途方にくれている娘を見かねて、自分の家に連れて帰ることにしました。

娘

「今夜は　わしの家に泊まるがええ。竹やぶのむこうだが歩けるかね」

「ありがとうございます。助かります」

娘は、ほっとしたのか、笑顔になりました。

帰り道、いろいろ話しをしているうちに由緒ある家柄の娘であることがわかりました。

農家の主人

「さあ着いただ、遠慮はいらない上がってゆっくりなされ」

と言うと、かみさんにもてなすように頼みました。

農家のかみさんは、娘の上品な様子を見て、

「今夜はゆっくり休んでくだされ」

と丁重に扱って奥の間に休ませることにしました。

かみさん

そして、かみさんが仕切りの戸を閉めようとすると、娘が

「開けておいてください」

娘

娘

かみさん

と言うのでそのままにしておきました。

夜がふけて、天井ばかり見ているので変だなと思いましたが、慣れない床で寝つかれないのだろうと思い主人とかみさんは眠りにつきました。

ところが真夜中を過ぎた頃、ふとんから起き上がった娘は、辺りに気を配りながら、部屋の隅にあった踏み台を持ち出し、天井に吊るしてある鮎を取ろうとしました。

背伸びをしても届かないので、思い切ってピョンと飛び上がった拍子に足をふみはずし、床に落ちて、すねにけがをしてしまいました。

主人とかみさんが物音に驚いて起きてくると　娘は、

「私はどうゆうわけか、小さいころから魚の匂いをかぐと見境がなくなってしまうのです」

と恥ずかしそうに言うのでした。

かみさんは、娘のすねが赤くはれ上がっているのを見て

「いま薬をぬってやるから、ちょっとしみるかも知れないけど、辛抱しなされ」

娘

娘

かみさん

娘

と打ち身薬をつけてやりました。

この家に代々伝わっている打ち身薬は、からしとうどん粉を混ぜ、塩と酢で練ったものなので、皮膚に少しでも傷があると強烈にしみるものでした。

薬をぬられた娘は、歯をくいしばってしばらく我慢していましたが、やがてものすごい声をあげて、

「ギャー！　コーン　コーン」

と狐の姿になると勝手口からあわてて逃げ出しました。

それから四、五日たったある晩、かみさんが一人で留守番をしていると、あの娘がたずねて来ました。

「私は近くの竹やぶに住む狐です。このたびはご迷惑をおかけしたのに、ご親切に手当てまでしていただき、ありがとうございました」

「すねのきずは、もうすっかり治ったのかね」

「はい、おかげさまでけがは良くなりました。今日は、お礼に食あたりの薬を持って参りました」

と言って、珍しいキノコを取り出しました。そして、キノコの採れる秘密の

娘

場所や、薬の作り方を説明して

「この薬のことは、ほかの人には決して言わないようにしてください」

と言うと娘はそのまま立ち去りました。

ある日、農家の主人が腹痛で苦しんで仕事から帰って来ました。置き薬をきらして困っていたかみさんは、狐の持って来てくれた食あたりの薬を思い出し、半信半疑でしたが主人に飲ませました。

すると、腹痛がピタリと止まり、みるみる元気になりました。

この薬は、上郷のある家に「家伝の毒消しぐすり」として明治の初めまで、伝えられていたということです。